



矢島 渚男 選

河馬の耳体に埋もれ水澄めり

【評】河馬は堂々と美しいが耳の句は少ない。この句、体に埋もれるように小さい、という。耳に水が入らないようになっているのかな。俳句に大切なウィットがあり、面白い。濁世と腐たす世の隅新酒酌む

【評】腐りきった末世だなど世を嘆きつつ世の中の隅で秋には早速新酒などを楽しんでいる俺だなあ...と自分を嘆く。東洋的詩人には古来そういう人物が多いようです。なかなかまど溪谷深き片紅葉

【評】中七は少々説明的になはっているが、正確な自然詠ではなからうか。万博の空飛ぶタクシー月に夢

酒田市 地主 久二
仙台市 スタセツコ
さわやかや酸素ボンベを引く人も
東京府 奥村 和子
新涼や五時の時報に友の曲
鳥取県 埴田小夜子
目に見えぬ残り時間や冬の虫
佐野市 高橋すみ子
いつの間に電話ボックス失せて秋
大和市 岡崎 穂子
透かし見る種の大きき柿を干す
調布市 浅野 文男

高野ムツオ 選

金風や居るはずの無き妻の声

【評】五行説では金風は秋風のこと。哲学的な意味はともかく、輝く夕空を吹く風を連想させる。もっとも、亡き妻の声は作者の妻恋の「途」が呼び出した。実に切ない。

ほまち田も捨田となりて秋桜
北上市 菅原のり子
【評】農家の女性が現金収入を得るためひそかに耕していた田も今は秋桜の地となった。現代の農の現状がさりげなく切り取られている。

新走り舌にころがす古女房
南房総市 山根 徳一
【評】晩酌はいつも差しつ差されつ夫婦。手に入れた新酒を早速二人で味わう。妻の笑顔が何よりの肴。のうけもこうなれば許せる。

一面曼珠沙華黒揚羽数多
町田市 枝沢 聖文
烏瓜引けば唇月揺らぎけり
稲城市 山口 佳紀
一年を真つ白にして障子張る
大和市 おおもりじゅん子
子守唄に包まれてある赤とんぼ
茅ヶ崎市 原田 博之
鱈雲退屈といえは退屈
東海市 斉藤 浩美
牧牛の角に蜻蛉や山とる
津市 中山 道春
秋声やびくりと動く馬の耳
さいたま市 池田 雅夫

正木ゆう子 選

介護課の液体糊に秋日かな

【評】役所の窓口にある液体糊に日が当たって透けている。たまたま目に入った、ありふれた物。そこから何かに思いを致すのは、読者の方だろう。一人一人にある介護の事情。亡き妻と病雁の俺さへ行く

【評】芭蕉の「病雁の夜寒に落ちて旅寝かな」を思わせる。切実な中にも詩としての潤いが感じられ、「俺」の親しい響きにも救いがある。秋の夜の繰り返し観る映画かな

【評】いちばん回数多く見た映画は何だろう。思い浮かべる映画は人それぞれ。素晴らしい映画は何度見ても面白く、新しい発見がある。木犀の香のかたまりを破り行く

東京府 望月 清彦
相模原市 大谷千恵子
満月や駅ホームにうづんの香
奈良市 伊東 勝
むき出しに向日葵の種秋の風
奈良県 新谷 省吾
かけつこは今日が本番天高し
大津市 竹村 哲男
十月や農業公園産の蜜
東京都 松永 京子
灯火親し簿記三級の一夜漬け
志木市 谷村 康志

小澤 實 選

わが剃きし栗ころろの飯よそふ

【評】自分が剃いた栗が、まるのままたたくさん入っている飯を炊き、よそっている、というのだ。「栗飯」「栗ご飯」ではすまない一膳であることが、よく伝わってくる。

【評】山の峡谷を鮭が産卵のためにさかのぼってくる。それを捉えようとして獣も川べりに潜むのだ。この獣を影として、鮭に焦点を当てる。花野行く金色ボタン鼓笛隊

【評】花野を行く金色ボタンをつけた服を着たひとたちは鼓笛隊なのだ。金ボタンも楽器も秋の日にきらきらときらめいて、まるで夢の中のように。坂道をとんとん弾む木の実かな

春日部市 水夢
廣島県 三宅千恵美
鷹渡る戦艦沈む海の上
小山市 松本 喜雄
爽やかな子らのかけ声草野球
狭山市 小俣 敦美
猪食べし残骸ばかり栗探す
薩摩川内市 末永 芳子
禿頭の赤々と酔ひ村芝居
東京都 天地わたる
リュックを負ひ銀河を背負ひ塾の子は
神戸市 大岩 正典
大木にぎゅっと抱きつく冬に入る
高岡市 池田 典恵

俳句あれこれ 堀本裕樹 (俳人)

ペペとミミ

妻と娘が祭りに行って、金魚を持ち帰った。娘は撥えなかつたが二匹くれたという。早速妻が水槽やエアポンプや餌などを揃えて、本格的に飼いはじめた。今まで虫かごにバツタや玉虫やカマキリ(二匹入れたら、共食いするという悲惨な結末になった)を入れて、二、三日飼ったことがあるが、長期を見据えて、娘が生き物を飼うのは初めてである。ペペちゃん、ミミちゃんとなつて、登園前と帰宅後、楽しそうに餌をあけていた。「いつ大きくなるの?」と娘。「だんだんね僕。じゃあ、水槽も大きくなないとね。こんな大きな!」と娘が両手を広げる。「そんなに大きいのか?」と僕。飼いて「一緒に泳げるのかな?」と娘。泳げるかもねと僕。「でもさ、噛まれるよ」と娘。「金魚は歯がないから大丈夫だよ」と僕は笑った。娘も「そっか」と大笑いして、愛おしそうに二匹を見つめた。△子はペペとミミと泳ぐよ夢さやか 裕樹



題字デザイン・イラスト 福田美蘭